

## J. H. カンペ『ロビンソン二世』（1779/80年）と 後期啓蒙主義市民階級の自己理解

桑原 ヒサ子

このことから人間は、みずからの善い行為によってのみ幸福に値するようになるということを理解できるわけである。神の律法は同時に自然法として成立しなければならぬ。というのも、神の律法は恣意的なものではないからである。したがって、宗教は道徳性の全体の一部にすぎないことになる<sup>(1)</sup>。

### I D. デフォーの『ロビンソン・クルーソー』受容とカンペの『ロビンソン二世』

D. デフォー Daniel Defoeの『ロビンソン・クルーソー』*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe* は、1719年（第一部に続き、第二部も同年、第三部はその翌年）に出版されると直ちに6カ国語に翻訳された。ドイツでも翌1720年に訳本が出ている。翻訳が出るや、最初の10年間で少なくとも28の模倣作が書かれたというから、その反響の大きさを窺い知ることができよう<sup>(2)</sup>。デフォーの小説はその後も18世紀だけでなく、19世紀に入っても多数の「ロビンソンもの」と呼ばれる亜流作品を産み出していった。しかし、『ロビンソン・クルーソー』の受容のあり方は一様であったわけではない。一大転機をもたらしたのは J. J. ルソー Jean-Jacques Rousseauであった。

ルソー以前の数十年間における「ロビンソン」理解は、のちの捉え方とは根本的に異なっていた。ルソー以降、現代の私たちに至るまで、ロビンソンの孤島生活こそが小説の中心なのであるが、ルソー以前にはこの孤島生活は全く印象が薄いと考えられていた。島の滞在は、作品構造的には伝統的な悪漢小説に通じる挿話風小説の中で、ほかのもっと面白い出来事の中の一つのエピソードに過ぎなかったのである。『ザクセンのロビンソン』*Der Sächsische Robinson* (1723/24年)の作者は、「ロビンソン」という言葉は「ドイツ人の中では、この世でさまざまな僥倖や災厄を被る人間を指すフランス語の冒険家アヴァンチュリエをふつうは意味<sup>(3)</sup>」すると述べている。これに従えば、ヴァリエーションの難しい孤島のエピソードは、海賊に襲われ奴隷となる体験

や、現在ではほとんど注目を浴びない『ロビンソン・クルーソー』第二部の幾多の冒険と比べて、はるかに模倣されることが希だったのである。

しかし、教育的価値という視点でこの小説を検討したルソーは、これらの数々の冒険を「あらゆるがらくた」と見なし、無人島のエピソードだけが教育的に重要だという判断を下した。こうしてロビンソンは世界を経験するために航海に出る冒険家であることをやめ、世界を股にかけた数々の冒険譚は取り除かれることになった。

ルソーはホップズやロックの社会契約説を経て、さらにこの理論を発展させ、これを社会契約を充たすことのできる人間像の模索と結びつけた。1762年（独訳も同年）に出版された教育小説『エミール』*Emile*はそれに相応する教育理論であった。

常に転変を続ける世の中で自立できる人間を養成するには、特別な技能を覚えさせるだけではもはや不十分であり、むしろ「自然の秩序」から、その「自然の秩序のもとでは、人間はみな平等であって、その共通の天職は人間であること<sup>(4)</sup>」に見るルソーが引き出した結論は、子供を「人間」に教育することだった。しかし、大人は「人間」の手本とはなりえなかったので、ルソーは子供の世界を大人の世界から切り離し、教育の場を都市から離れた田舎の自然へ移したのだった。規則に従う教育ではなく、実習を通して行われる実地教育によって子供は生きるための条件を学び、ついには他人の助けを借りずに自ら判断し自由に行動する人間になることができるのだった。『エミール』の中で「自然教育のもっともよくできた概説を提供する一巻の書物」<sup>(5)</sup>として12歳ないし13歳のエミールが最初に手にし、長い間読むに値する唯一の本として『ロビンソン・クルーソー』が指定されているのは、島という社会化以前の状態にロビンソンが置かれ、たった一人で自給自足の生活を達成することによって、ついには判断力を持った個人として自立するまでが描かれているからである。ルソーが関心を持ったのはしたがって、ロビンソン物語ではなく、孤島でロビンソンが置かれた境遇だけだった。ルソーは「ロビンソン」理解に教育的機能転換をもたらした。すなわち、エミールはロビンソンと同じ境遇に身を置き、ロビンソンを模倣して行動し、場合によっては、自分の手本であるロビンソンよりうまくできることもあり、自分の手本を批判することもある。これまでのロビンソン受容では考えられなかった可能性である。

こうして『ロビンソン・クルーソー』受容において、僥倖や災厄を体験しながらも、自分の性格を発展させ得ない悪漢小説の主人公から、世界を経巡りながらも常に自覚を持ち、世の中を省察する主人公が誕生する。その主人

公の発展にとって島の滞在は中心的意味を持っていた。

ルソーの子供の発見と自然教育思想の影響によって、以後ルソー流の考え方に基づいた一連の「ロビンソンもの」が産み出されることになる。ルソー以前にもロビンソン物語は子どもたちに読まれていたとは言え、ルソー以後は子ども向けに書かれるようになったのである。それも孤島時代を中心とした第一部に限定されてである。啓蒙主義運動は教育意欲と強く結びついていたので、18世紀後半に児童書・児童文学というジャンルが誕生したのは啓蒙主義の当然の帰結であった。こうしてルソーと伴に『ロビンソン・クルーソー』は児童文学の古典となり、この傾向は19世紀も末になって「ロビンソンもの」が次第に書かれなくなるまで変わることがなかった。本来大人向けであったデフォーの長編小説の見直しが行われるのは、ようやく20世紀に入ってからのことである<sup>(6)</sup>。

J. H. カンペ Joachim Heinrich Campe (1746-1818年)の『ロビンソン二世、子どもたちの楽しく役に立つ話し合いのために』*Robinson der Jüngere, zur angenehmen und nützlichen Unterhaltung für Kinder* (1779年、第二部 1780年。仏訳は同年に、英訳は1788年<sup>(7)</sup>)もルソーから強い影響を受けた汎愛主義教育Philanthropinismusの立場から書かれた児童教育書である。多くの「ロビンソンもの」のほとんどが今日忘れ去られている中で、カンペの作品は出版されるや大成功を収め、19世紀においてもJ. D. ヴィースJohann David Wyßの『スイスのロビンソン』*Der Schweizerische Robinson* (1812年)と並んで最も成功した児童・青少年向き図書に数えられ、今日なお出版され続けている<sup>(8)</sup>。

カンペは児童文学作家として『ロビンソン二世』のほかにも今は忘れ去られた数多くの作品を残している(『子どもと青少年向け文学全集』30巻、1817年)が、その根本には汎愛主義教育者カンペの姿がある。学校制度改革者としての、また国語浄化主義者としての活動にも同じことが言える。それゆえカンペに関する先行研究には教育学的アプローチが取られることが圧倒的に多い。『ロビンソン二世』も例外ではない。しかし、ここではこの有名な児童書を教育学的視点から分析することは意図していない。

デフォーはアレクサンダー・セルカークの実話に触発されて『ロビンソン・クルーソー』を執筆した。船長との諍いからチリの西方に位置する無人島に置き去りにされたセルカークは、帰還が叶うまで四年間をそこで過ごす。彼は山羊や野生の実を食し、話し相手がいなかったため言葉を忘れていった。彼が生き延びることができたのは、自然を文明化することによってではなく、

自然に自らを適応したからだった。このヨーロッパ人は島にあって「未開人」となったのである。おそらくこちらの方がずっと当たり前に思えるのだが、デフォーは、大きな成功を求めて世界に飛び出し、冒険を重ねながらも功利主義とピューリタニズムによって富を得て帰国するロビンソンの一生をイギリス近代市民階級を代表する経済人の寓話として描いた。そしてルソーは、退廃的社会に対抗するための自然教育理論の中で、無人島におけるロビンソンのサバイバル物語（ある程度自給自足が可能になったロビンソンは、回心に至る直前に次のようにこれまでの生活を振り返る。「私にとっては神とか摂理とかというものはまったく問題にならなかった。そしてただ自然の理にしたがひ、常識の命ずるがままに一個の動物として行動したにすぎなかった。それさえも、はたして常識といえるものであったかどうか怪しいものであった。」<sup>(9)</sup>)に新たな教育上の可能性を示して見せた。カンペは『エミール』に刺激されてロビンソン物語を取り上げるが、形式はルソーとは全く別のものであるし、教育理論についてルソーの影響下にあったが、18世紀後半ドイツの社会状況に合わせて大きく異なる点もあった。例えば、子どもを田舎の自然の中で自然児として育てるのではなく、子どもを市民社会に役立つ人間に育てることを目的としている点である。

この教育目標を目指して何をどう学ぶべきなのかが『ロビンソン二世』には書き込まれている。この本の読者対象は市民階級の子弟と教育に関心を持つ大人である。その上で、18世紀と19世紀におけるこの教育的児童書の記録的な販売実績を重ね合わせると、カンペが描く理想的市民像が実際に市民階級に広く受け入れられ、勃興する市民階級を支えてたことを証明している。ここでは、『ロビンソン二世』から市民のアイデンティティを構成する主要な要素を抽出し、後期啓蒙主義市民階級の自己理解について明らかにしようと思う。

## II 汎愛主義教育運動とカンペ

まずカンペの経歴<sup>(10)</sup>を簡単にまとめてみよう。カンペは当時の市民階級の人間が社会的に頭角を現すための典型的な経歴を辿ったからである。その履歴から汎愛主義の教育改革運動に係わっていくことも容易に理解できる。教育改革運動は学校教育の領域を超えて、社会的政治的意味合いを帯びていた。すなわち、教育は解放をもたらすと信じられていたのである。

カンペは1746年にブラウンシュヴァイク公国領の村デーゼンに生まれた。村の人口は500人、多くは農業で生計を立て貧しかった。カンペの父は農場を所有し、ヴェーザー山地の家内織工と糸や亜麻布を商いする卸商だっ

たので、生活は村の農民より豊かだった。家の前に広がる池の向こうには同族の領主のカンペ一族の荘園が広がっていた。父はカンペ家の者が牧師の娘に産ませた私生児だったため、貴族の称号を許されなかった。

デーゼンの学校は倒壊しそうな古屋で、夏は6時から7時に始まり1～2時間授業が行われた。収穫期は休校。教員はもと仕立職人で、子供は毎日薪を一本授業料として持参しなければならなかった。1786年に字を書ける子供は10人に1人しかいなかった。1836年になっても一人の教師が198人の子供を教えていた。この状況はドイツ国内ではどこでも大差なかったようである。

七年戦争(1756-63年)は略奪、飢饉そして疫病の時代でもあった。カンペは14歳までデーゼンで過ごしているが、幸せな子供時代だったとは言い難い。18世紀においてこの境遇から抜け出して出世する典型的な抜け道は、教養を身につけること以外なかった。ラテン語学校を卒業し、大学で神学と哲学を専攻することは、出世コースの関門だった。初期市民階級の意識の中に根付いている文学・哲学的教養に対する高い評価と人間を変えることができる教育への信頼、この二つは、この過程を経て現実に出世することが出来た市民階級出の人々の社会化の経験に根ざしていた。

14歳でカンペはホルツミンデンの学校へ進学し、猛勉強でラテン語を習得する。19歳でヘルムシュテット大学で神学を専攻するが、まもなく教義批判的の神学に惹かれてハレ大学へ移籍。その後、フリードリヒII世の保護下でドイツではいち早くリベラルな精神文化を展開しているかに見えたベルリンへ向かい、これもまたお定まりの過程だが、プロイセンの少佐で侍従フォン・フンボルト家の家庭教師(1769-73年)となる。1773-75年までポツダムでわずかな年俵の従軍牧師となり、1775年に再びフォン・フンボルト家で家庭教師の職を得、アレクサンダーとヴィルヘルム兄弟を教育している。同年再び短期間ポツダムの従軍牧師を務めるが、牧師職を偽善として以後これを拒絶。これによりカンペは汎愛主義教育者としての活動を始める。

J. B. バゼドー Johann Bernhard Basedowを創始者とする汎愛主義は、一方ではエリート・貴族的階級教育を、他方では宗教・哲学的書籍による知識詰め込み教育を打破して、誰もが幸せになれる前提として実践的で公共に役立つ教育を目指した。

1750年頃のラテン語学校は、内容は信仰告白を迫るカテキズムとラテン語の反復練習による文法で、精神の鈍磨を招くほどの厳しい教育方法が取られていた。こうした状況を告発したのが汎愛主義者たちだった。カンペの表現を借りれば、このような教育によって「神が造られた素晴らしい若者は病

弱で、青白く、悪趣味で、自惚れが強く、知識と尊大さではち切れんばかりのヒヒに作られる」か、自然で、生き生きした市民階級の子供たちは人間ではなく、老衰した学者になるか、もっとひどい場合は「偽装術を身につけた紳士連」や「人に命令するだけの旦那様」に造られる<sup>(11)</sup>。

この教育改革運動によって改善が見られたものの、18世紀後半のラテン語学校は教育の専門家たちだけでなく利用者からも背を向けられるようになる。ベルリンやハンブルクの名の知られた学校でも、各学年に一クラスしかなく、それどころか最上級クラスが成立しなかったり、10歳以上も年齢差のある子供たちが一緒に授業を受ける有様だった。というのは、貴族の間では当然のことであったが、市民の間でも家庭教師を雇うようになっていたからである。こうした家庭教育では現代外国語を習得し、実生活に役立つことを習ったので、ラテン語学校での修道院的しつけや勉強内容よりずっと多くを身につけることができた。教育を受けたことが社会的ステイタスになる時代でもあった。

1776年バゼドーの招聘に応じて、カンペはデッサウの汎愛学校das Philanthropiumへ赴任する。だが一年も経たずにこの31歳の新任教員は出奔してしまう。理由は不明だが、同僚との不和とも、理想だったはずの汎愛学校の「工場の教育」に失望したからとも言われている。

カンペが向かった先はハンブルクだった。すでに共和制であったハンブルクは当時のドイツにおいて特別な位置にあった<sup>(12)</sup>。ハンブルクは、イギリスの「タトラー」や「スペクテイター」を手本に、市民階級の知的道徳的水準を向上させる目的でドイツ初の「道徳週報」が1713年に刊行された都市であり、続いて1724年に5000人の予約購読者を持つ「愛国者」Der Patriotが創刊されている。国民劇場の設立（1767年）そして、レッシングの『ハンブルク演劇論』（1776-79）は啓蒙思想が明確な形をとったものとして一般に意識されていた。また、ハーゲドルン、クラウディウス、クロップシュトックといった名前はこの商業都市が前衛的市民文学の中心地であることを証明するものだった。

ハンブルクの市民層は文化や啓蒙思想だけでなく教育問題にも関心を持っていた。彼らは自分の子供たちを家庭教師に教育させるか、自らが運営に携わる新しいハンブルク商業アカデミーに委ねた。新しい精神に基づく学校の設立は、ハンブルクの商人たちの商業的関心や、新しい啓蒙思想だけでなく、1768年にデンマークの支配から脱し1770年には帝国自由都市として帝国議会に議員を送れるようになるなど、ハンブルクが迎えた新たな政治的局面からも緊急を要していた。したがって、啓蒙の自由思想を信奉する者には、ハ

ンブルクがほかのどの都市よりもそうした思想の実現を約束する場所に見えたとはいえない。

カンペがハンブルクに移った翌年の1778年、ハンブルクの富裕で名望ある3人の商人から彼らの息子たちの教育を依頼される。J. ベール Jakob Böhl はエルベ河郊外のビルヴェルダールにカンペのために家を用意し、カンペはそこで農業を営みつつ自分の娘ロッテと一緒にベールの息子たち、ヨハネス、ゴットリーブ、フリッツ、祖父がハンブルク市長を務めるニコラス・シューバック、それに商人の息子ディートリヒ・ライシングの教育を依頼される。『ロビンソン二世』に登場する子供たちである。ハンブルク滞在(1777-83年)はカンペの人生で経済的にも仕事の上でも最も実り多い時期となる。ハンブルク時代とその直後に数多くの重要な児童書が成立しているが、その中でもカンペの名を有名にしたのは何と言っても『ロビンソン二世』であった。

しかし、ビルヴェルダールでの教育が次第に負担となったカンペは、ホルシュタイン州トリックウヘ引きこもって農業と執筆活動に専念するようになる。1786年にはブラウンシュヴァイク公爵の招聘でリュネブルクの視学官となり学制改革に着手するが、貴族や聖職者ら保守派に妨害され改革は中断する。1789年フランス革命が勃発すると、かつての教え子ヴィルヘルム・フォン・フンボルトを伴い、パリで革命を体験する。1792年にはフランス共和国からワシントン、クロップシュトック、シラー、ペスタロッチと共に「革命の友」として名誉市民の称号を贈られている。パリから戻ったカンペは政治化する。プロイセン王の検閲に反対したことでブラウンシュヴァイク公の怒りを買ひ、執筆禁止の処分が下される。このためカンペはハンブルクに移り、当時検閲制度のなかったデンマークに属していたアルトナで出版を続けた。1810年に病氣療養のためにカールスバートに滞在しているが、それは丁度ゲーテの滞在と重なっている。1818年、生前の指示によってカンペは教会葬を行わずに埋葬され、そして貧しい子供たちに『ロビンソン二世』2000部を配布させている。

Ⅲ 『ロビンソン二世』における労働、宗教そして家庭について：「この家族のモットーは、**祈りそして働きなさい！**だった」<sup>(13)</sup>

『ロビンソン二世』は、「父親」が「ロビンソン物語」を「その子供たち」に30日間、毎日の仕事の終了から夕食までの時間に物語る形式を取っている。

カンペは前書きの中でルソーを長々と引用して、『ロビンソン・クルソー』の教育的貢献の意味を強調している。カンペもルソー同様「あらゆるがらくた」を除いた無人島滞在を中心とした第一部に物語りを限定しているが、

原作の重々しい表現や古いドイツ語訳の時代遅れ、あるいは誤った言葉を訂正し、子供のことを考えると問題ある道徳上の場面に変更を加え、上質の児童書を目指したことが記されている。

カンペがロビンソンの島の滞在物語にどのような意味を持たせようとしているかは、やはり前書きに記されているロビンソンの発展三段階を見ればはっきりする。

第一期では、一つには独りぼっちの人間がいかに寄る辺のないものか示し、他方ではどれくらいの思案とたゆまぬ努力で私たちの状況を改善できるか示すために、彼はたった一人で、それもヨーロッパで使用されている道具は何一つ持たずに、自らの分別と自分の両手だけで何とかしなければならぬ。第二期は、ほんのわずかな人間関係が人間の状況をどれほど改善するかを示すために、彼に一人の協力者を付き添わせた。第三期にようやく海岸に一隻のヨーロッパ船を座礁させ、それによって彼にさまざまな道具や生活に普通は欠かせない品々を与えた。私たちには無くて困ることがないがために常日頃過小評価しがちな多くの物の大きな価値がこれにより実によく理解できることだろう。(11頁)

カンペのロビンソンはデフォーの場合とは異なり、難破船からヨーロッパ文化の象徴である道具類を一切持ち出すことができず、文明のスタートラインに立って無人島での生活を始めなければならない。ルソーをもっと徹底させた状況と言える。一方、島での社会的生活には関心を示さないルソーとは対照的に、「社会生活の広範な幸福」を意識させることはこの児童書の重要な目的だった。つまり、「父親」が語る「ロビンソン物語」は、デフォーの原作に大きな変更を加え、ルソーとも部分的に異なるカンペ自身の教育論に従って、18世紀後半のドイツ市民を対象に改作されているのである。

一方「父親」と子供たちの作品構成上のレベルを見てみよう。先述したように、ハンブルクの3人の商人の息子たち5人が実名で登場する。一番年下のロッテだけがカンペの実娘である。その後「25日目の夕べ」にマティアス、フェルディナント、コンラート、ハンス、クリステルそしてハンスの6人の新しいメンバーが加わり、「一部は自然の絆によって、一部は相互の愛によって一つに」(19頁)になった家族は拡大する。主要な人物である子供たちの他に、彼らより年上の友達が二人登場する。しかし、彼らは単に「友達B」、「友達R」と紹介されるだけで、物語に絡む頻度も少なく、その重要性は少ない。「母親」も登場するが、二人の友達よりもさらにその役割は軽い。



「父親」が絶対的で支配的な人物であって、いかなる専門家の助けも必要としない全知の教育者である。

子供たちは、「父親」によって語られる「ロビンソン物語」に自発的にコメントを加えたり、時にはそのコメントを切っ掛けに「父親」によって話し合いへと導かれたり、ある子供が質問すると、説明できる子供が答えたり「父親」が説明したり、「父親」が質問する場合もある。質問は大きく二種類に分類される。国名、道具類、動植物、航海の専門用語、自然現象、地理上の質問など、情報を得るための質問と、もう一方は、例えば正当防衛の殺人の場合のような道徳的判断や「思慮分別を超えた」問題としての宗教についての解釈に係わる質問である。「ロビンソン物語」はこのように頻繁に中断され、対話部分は作品全体の三分の一にも及んでいる。

児童書や教訓文学では一般的であった対話形式は、同年代の読者が容易に作品の中の子供たちと自己同一化することを可能にさせた。歴史家のK. F. フォン・クレーデン Karl Friedrich von Klöden (1768-1856) は、11歳の時に読んだこの本についてこう振り返っている。「(...) すぐに私は、まるで自分の兄弟みたいに彼らと仲良しになった。特にフリッツが私のお気に入りだった。(...) 私はどの場面も細部に至るまで絵に描くことができただろう。私はロビンソンと一緒に生活し、感じ、彼はもう一人の私自身になった。こんな体験は初めてのことだった！」<sup>(14)</sup> 子供たちは最初、ロビンソンに対して反感（「わあ、そんなロビンソンなんか許せない。」「ぼくも。」(23頁)）を示すが、最後には子供たちの圧倒的な賛同で終わる（「ぼくもそうする！」(347頁)）。物語の展開と共に次第に膨らんでゆく子供たちの賛同の反応は、習得すべき社会的規範にロビンソンの行動が徐々に適合していくプロセスを確認する合図として意図されている。生徒としての彼らは、読者としての子供たちにとって模範的存在となっている。もちろんこの模範性は恣意的なものではなく、たとえ「17日目の夕べ」のロビンソンに宛てた子供たちの手紙を含めて、「父親」と「子供たち」の会話すべてが実際のやりとりを記録したドキュメントであったとしても<sup>(15)</sup>、それはロビンソンの行動を補完し、正当性を認める周到に準備された「父親」の質問や解釈によって誘導され作り出されている。そしてこの模範性は理性的市民道徳と相関をなしているのである。

作品の冒頭、まだロビンソン物語が始まる前に短い導入が付記され、その中にこれから登場する「家族」のモットーが「働くことと祈ること」であることが紹介されている。子供たちは「父親」から物語を聞いている間にも

「有益な仕事」をするよう促されて、エンドウ豆を剥きトルコ豆の筋を取り、のちにはロビンソンの作業を追体験するために傘やかごを実際に作ってみたりする。汎愛主義教育が重視した仕事のための教育の一端が見られるが、それ以外ではこの「家族」がどのように働き、祈っているのかはよく分からない。分かっていることは、ロビンソン物語を媒体にして子供たちを教育する際に労働と宗教の問題が重要なテーマとなっていることである。それではカンペは18世紀後半のドイツ社会を背景に、市民階級を支える根本的なこの二つの問題をどう作品に書き込んでいるのか、まず労働について、次に宗教の問題について考えてみたい。

「3日目の夕べ」から無人島に漂着したロビンソンの生き抜く闘いが始まる。貝を探しては食し、ジャガイモを発見し、ラマを狩って肉を得る。石から道具を作り、日傘、かぼん、靴を作り出す。ロビンソンは島のあらゆる物を注意深く観察し「有益」と「無益」の尺度で振り分けていく（「これは何のために役立つだろうか、と彼は繰り返して自問した」(6日目の夕べ、94頁)）。労働は生き抜くために必要なものを得、作り出すためだけではなく、「恐ろしいほどの退屈に苦しめられないように」(143頁)ロビンソンは働く。長雨の時には例えば鍋作りをするが、作れば作るほど技術的に向上した(10日目の夕べ)。縄を織い、弓と矢を作る際にはよく考えてから仕事にかかり(10日目の夕べ)、陶器のうわぐすりを掛ける試みでは失敗の原因を熟考することで「技術改革」をもたらしている(11日目の夕べ)。島での生活がある程度安定するようになった頃のロビンソンについて「父親」はこう語っている。

なぜなら勤勉は彼にとって今となっては、有益な仕事をして時間を潰さないではもはや生きていけないほどの習慣となっていた。のちに彼がよく言っていたことだが、彼が改心できたのは特に、孤独な滞在の初期に頼るものがなかったがゆえに常にせせせと仕事に励まなければならなかった境遇のお陰だった。勤勉は、と彼はつけ加えた、勤勉は、みなさん、数々の美德の母なのです。怠惰があらゆる悪徳の始まりであるように！  
(169/70頁)

さらに年月が経ち、ロビンソンは殺されそうになるフライタークを救う(15日目の夕べ)。カンペが予告したロビンソンの発展段階の第二期である。フライタークという仲間を得、彼のお陰で再び火を手に入れ、そして美味で滋養のある暖かいスープを食べることができた瞬間、ロビンソンはまるで再

びヨーロッパへ戻ったかのような幸福を感じる。この幸福を忘れぬために、労働が不要にならない限りはこれまで通りこつこつとたゆまず働くこと、週に一度日曜日には、これまで通り生の食材を食べること、そして月に一日はこれまでの孤独を思い出すために、フライタークと離れて過ごすという課題を自らに課す。そしてこの決意を忘れぬために、住居となっている洞窟の玄関上の岩壁に斧で「勤勉」Arbeitsamkeitと「節制」Mäßigkeitの二語を刻み込む（17日目の夕べ）。

ロビンソンの労働と禁欲のエトスの背景には、16世紀以来ヨーロッパ各国で成長する市民階級が経済的利益を追求する際の姿勢がある。たゆまぬ労働意欲、危険に対する覚悟、計画的な資金の投入、自らの力への信頼、享楽と衝動の抑圧、これら、財産と安楽さを倦むことなく増やそうとする市民階級の生き方に不可欠な「資本主義の精神」とも呼べる態度は、社会化のプロセスの中で内面化され、信条化されてゆく。

この傾向は汎愛主義者の「労働」理解にも見て取れる<sup>(16)</sup>。汎愛主義者にとっても労働は生活の糧を得るために不可欠な行動であったが、労働はキリスト教的伝統に照らし合わせた重い義務ではなく、「喜び」そのものになる。すなわち労働は行動したいという本能、もしそれが満足させられなければ退屈に陥ってしまうような、人間の根本的欲求と理解された。さらに、社会に対して有益な仕事をすることで、個人と社会の良好な関係を築くという労働の社会的機能が示された。また、「勤勉」は人間をさまざまな悪徳から遠ざけて、精神の健康を維持し、人間を道徳的に改善できると考えられ、労働は肉体的健康を保つこともできるとされた。その上、労働と技術力は名誉をもたらすと考えられたのである。

ロビンソンの中に描かれた人間の発展は、絶え間ない勤勉さと結びついてきた。その一方で、「ロビンソン物語」における労働は政治的に理解することもできる。「労働」は、古代以来貴族によって自分たちの生活様式として受け継がれている「閑暇」の対立概念である。

のちにフランス革命に感動し、フランス共和国から「革命の友」として名誉市民の称号を送られるカンベであったが、ドイツの封建的絶対主義があまりに強固であったため社会的平等など考えられるべくもなく、身分制社会の制約を受け入れていたように見える。しかし、その姿勢は諦念というものではなく、無為に贅沢な生活を送る貴族とは違い、有益な仕事を通して世界を変革しつつある市民としての自負が感じられる。

市民階層ほど、正しく実直で高貴な人間を多く持っている階層が他にあ

ろうか。これほど多様で偉大な知識や技術を国家のためや人類の幸福のために働かせている階層が他にあるか。人類に関するさまざまな年鑑を調べてみよ。それとも我々の同時代を見るだけでよい。そして出生によってではなく自分の業績によって、後代の人々から畏敬の念をもって名指しされるに値する卓越した偉人のすべてを数えてみよ。そして見よ、大部分がどの階層に属するかを<sup>(17)</sup>。

一方、領主たちを含む貴族や貴族の真似をする市民の教養層が属する上流階層の人々は心身共に衰弱し、道徳的事柄に対する正しい判断ができず、ひとに同情することもない。つまり彼らの生涯は虚栄ときまぐれと享楽に満ちていると断定する。そうした批判のあとで、啓蒙主義のお陰で「有益な知識」を得、「人間的に改善され」た領主や貴族も一部いると触れてもいるが、このポジティブな評価は、汎愛主義者独特の「有益」とか「啓蒙された人間的思考」という市民的尺度で計られていて、結局のところ貴族の模範となる市民道徳の優越が主張されている<sup>(18)</sup>。

ある時ロビンソンが竈を造ろうと地面を掘っていると、金塊を発見する。一夜にして大富豪になれるほどの大きさだったが、斧やナイフ、釘やそのほかの「有用な道具」を作り出せる鉄であつたらどんなによかったかと、彼はこの王権の象徴である金属を軽蔑し、その後も一顧だにしない。(96頁)「ロビンソンの発展段階の第三期」で、彼とフライタークが座礁したヨーロッパ船からさまざまな物を運び出す際に、金とダイヤモンドを救い出す、それはデフォーのロビンソンのようにその換金価値を計算してのことではなく、もし所有者が現れた時には返して喜ばせようという全く道徳的使命感からであった。(278頁) 政治的関連から見る必要のある場面をもう一つ挙げておこう。フライタークを救い、話し相手を得て喜んだものの、不確定要素が多かったため、しばらくは国王として振る舞おうとロビンソンが考える件である。ここでの国王とか王国という表現の使用が、反封建主義の姿勢に矛盾しないことをカンペは「父親」を通じて解説する。すなわち、神からの恩寵によってではなく、労働と有徳によって土地を獲得したことを根拠にロビンソンを「真の国王」(207頁)だと宣言する。とはいえ彼の支配下にあるのは家臣一人、ラマが二三頭、それに鸚鵡が一羽だけだ。将来の「総理大臣」になるフライタークにその仕事を覚えさせるため、国王のロビンソンは自らラマの乳を搾って見せる。この描写は子供たちの笑いを誘う。たしかにここには王権に対する皮肉が込められている。しかし、市民階級の側から見れば、これは理想の世界である。現実世界では市民階級はすでに半世紀以上にわた

り社会をリードする原動力となっていたが、絶対君主制のもとでは下からのイニシアチブは許されず、成長も自立も阻まれた状態だった。しかし、出自も問われず階級も存在しない無人島にあって初めて市民階級出のロビンソンは自らの技術力と思考力によって自分自身と島の支配者になることができるのである。カンベもまたユートピアとしての「島」のトポスに依拠していることが分かる。

カンベは前書きの中で五つの執筆目的を挙げている。第一に有益な授業をするためには子供たちを楽しませながら、第二に書かれた専門的知識ではなく、家庭生活や自然や人間の営みの中から基礎知識を授けることを目的としている。この二つは、これまでの学校教育の度を越した厳格主義と時代遅れで役立たずの授業内容の批判から生まれたものだった。第三に「ロビンソン物語」と博物学や地理学的知識を結びつけて教えようと考えている。第四の目的が最重要と断ってから「道徳、敬虔、そして神の摂理が示す道への満足の種を子供たちの心に蒔いてやる」(6頁)ことだと言っている。実際、神について言及される頻度は高く、コラールや宗教詩が挿入されてもいるし、神に対するロビンソンの呼びかけや訴えなどは宗教的感情に満ち、啓蒙主義者らしからぬ一面もある。前書きにおける宗教的意図の強調には、神学者からの攻撃を回避し、読者層を拡大しようとする意図があると憶測する向きもあるが<sup>(19)</sup>、私にはカムフラージュだとは思えない。カンベは「勤勉と節制」という市民道徳の根幹を市民階級に根付かせるためには、宗教的意味とは全く異なる新しい「神」の機能が不可欠だと考えたのだと思う。この神の理解は革新的であったから、晩年のレッシングと神学論争を繰り広げていた(相手の策謀によって論文発表を禁じられたレッシングが劇作によって所信表明したのが、宗教の寛容をテーマとした『賢者ナータン』(1779年)だった)ハンブルクの主任牧師ゲーツェは、説教壇から公に「教会ではなく、屋外の自然へと彼の子供たちを導いている」<sup>(20)</sup>とカンベを非難した。たしかにカンベの作品では悪魔とか原罪あるいは救済といった教会神学の公理については一切言及されていない。繰り返し持ち出されているのは「神の摂理」だけである。

1712年にフランス語で発表されたライブニッツの予定調和説は1722年までに弟子のヴォルフによってドイツ語に訳され出版された。それによってドイツでは予定調和説による「最善の世界」が哲学から文学へも波及し、30年代から70年代にかけて大変な盛り上がりを見せた。悪はより高次な善のために神が認めたもので、この世に起こることには十分な理由があるからこそ起

こののであり、この世はあるべき最善の世界であるという楽天主義は、現実世界で閉塞状態にあった市民階級にとって現実を弁護する心的補償として不可欠であった。カンペは市民階級の自己理解のため、その精神的解放と現実世界での発展のためには「勤勉と節制」に象徴される道徳を教育によって身につけなければならないと説いたが、その習得と実践を確固たるものにするために神の存在に二様の機能を与えたのである。

ロビンソンはある時、激しい雷を伴う嵐に遭って死ぬ思いをする。だが落雷によって火を得ることができる（「これも神様が私に与えてくださったのだ！」（89頁））。間もなくすると、今度は火山の噴火による大地震と津波に襲われる。ロビンソンが恐怖のあまり洞窟の住居を飛び出した途端、洞窟は崩壊する。語り手の「父親」は、この自然現象が恐怖で家を飛び出すほどの規模でなかったら、軟弱な地盤のためにロビンソンは土砂で生き埋めになっていただろうと説明する。家を失いはしたが、結局はそれはロビンソンの命を救う意図であり、よりよい家を造る契機となったというわけである。「父親」は子供たちに、「神の摂理を信じてさえいれば」、「将来に待ち受けている人生のあらゆる悲しい出来事に出会った時」、「第一には人間というものは身に降りかかる不幸はいつも実際より大きく感じ、第二には私たちの苦しみの全てが明察と善意により神によって私たちに差し向けられ、したがって最後には私たちにとって本当に最善のものになる」（135頁）ことが分かるだろうと結ぶ。のちにフライタークが、父親に会いに行くために造った小舟が嵐で流されてしまい絶望している時に、ロビンソンは彼に言う。「小舟を失ったことで私たちにどんな利益があるかは誰にも分からないのだよ。その事態を引き起こした嵐だって、私たちやあるいはほかの人々にどんなに大きな利益をもたらしたかなんてことは知るよしもないんだよ。」この「神の摂理」にフライタークは納得できないでいるが、この直後に二人は嵐のせいで座礁した無人のヨーロウパ船からさまざまな文明の利器を手に入れるのである。

カンペは反教会主義者ではあったが、社会生活の意義や世の中の営みに対する疑念や失望を人々に持たせないために「神の摂理」を利用していることは明らかである。「神」が担うもう一つの機能は、裁定機関としての機能である。ロビンソンは「労働と祈り」を結びつけて生活するようになってから、一日をどう過ごしたか自問することを常とした。

お前の心は神様に対する愛と感謝を感じたか。うまくいかなかったも神様を信頼し、嬉しかった時も神様を忘れなかったか。頭に浮かんだ悪い考

え、心に兆した悪い欲望もすべて直ちに抑えたか。そして、それでは今日は本当に善行を重ねたか。(182頁)

ここにはロビンソンが神の存在を前提に自らの行為を常に反省しながら市民道徳に則った生活を送ろうとする模範的姿が示されている。しかし、神の存在は「神の摂理」のみに限定されているので、神が世の中の出来事に介入する余地はない。したがって、実際には人間は自分自身を頼みとし、自己責任の下で自由に行動するということになる。こうして神の意志への服従は、市民の行動規範への絶対的服従へ、言い換えれば神に代わる道徳という最高機関に対する絶対的服従へと姿を変えているのである。

最後の第五の執筆意図には「感傷熱」に対する不安と攻撃の姿勢が読みとれるが、この第五の意図は第四の意図と密接に結びついている。今は少し和らいだとは言っているが、二三年前から猛威を振るっている「心を病ませる伝染病」に対抗するために執筆したと述べている。この病は、次代を担う若者たちに自分自身や、世の中を不満に思う気持ちを起こさせていると言うのである。名前は挙げていないが、年代やその社会的反響を考えれば、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』(1774年)を指していると推測できる。自殺を遂げる市民階級の青年ウェルテルの世界苦的感情は、最善の世界という神の摂理や啓蒙主義的理性宗教を脅かすものだったからだ。

デフォーのロビンソンが最終的には富豪として帰国するのに対して、カンペのロビンソンはハンブルクに到着する寸前にまたもや海難事故に遭い、全財産を失ってしまう。その後ロビンソンとフライタークはハンブルクで指物師の修業をしてマイスターになる。「父親」が教育している子供たちが将来なるはずの社会的地位よりだいぶ低い。デフォーとカンペの結末の違いには、それぞれの時代、それぞれの国の経済力、市民階級のあり方の差が背景にある。そのドイツの現実ゆえに、カンペは主人公の出世物語には全く関心を示さず、それどころか出世のために貪欲に利益を追求する姿勢は不道徳と受け取ったことだろう。カンペの結末は、作者の関心が専ら自立して生きられる人間の教育、道徳を身につけ社会において高潔に考え行動できる人間の教育に置かれた結果だった。カンペもドイツの市民階級の大方も、教育が封建的絶対主義を徐々に、そして平和裡に市民社会に変えることができる力を持っていると信じていたのだった。

カンペが『ロビンソン二世』の中で見せる教育は、カンペが失望したバゼドーの汎愛主義学校における「工場の教育」とは全く異なる、「家庭的学校」

と呼んでよいものである。小説の冒頭で「人数の多い家族」（19頁）と作者自身断っているように、血のつながらない生徒たちと教師ではあるが、その教師を子供たちは「お父ちゃん」と呼び、教師とその妻は子供たちを実子のように扱う。「実際の家庭の場面を忠実に描いたのは、「教師と生徒の関係には欠けてはならない父と子の関係という新米教師にとって有益な実例を与える」ためだと、教育学的意図を記しているが、教育の場が家庭である理由はそれだけではない。

18世紀は家族形態や機能が変化し始める時期だった。それまでの必ずしも血縁関係にこだわらない比較的大人数の家政家族は、生産共同体であり、法的共同体であり、公的業務を果たす役割も担っていた。市民階級の形成とともに、こうした機能が家の外に移されるにつれ、市民の住まいは私的領域となっていく。それにより家族間のつながりは親密になり、18世紀には両親に対して親称の "Du" で呼ぶ習慣も定着する。もはや子供はこれまでのように「小さな大人」と見なされるのではなく、市民の自己愛が投影される対象となり、無垢で可愛いという感情が発生した。市民階級は自分たちの子供を私的領域である家庭に囲い込んで、独自のエトスで教育しようと努めるようになってゆく。

カンペの『ロビンソン二世』は、家族形態の変動の時期にあって、新しい理想の家族像を提出していると言える。登場する子供たちも「父親」に対して "Du" を使い、親しみを込めて「お父ちゃん」Väterchen と呼びかけている。家庭が教育の場でなければならないことは言うまでもない。食後あるいは夕方の読み聞かせの習慣は特にプロテスタントが多い地域では古くからあり、説教集など宗教教育書が読まれていた。カンペはこの慣れ親しんだ形式の中に「ロビンソン物語」という新しい教育的素材を取り入れることによって、家庭内教育の新しい方向性を示している。そして、教育するのは父親である。父親は、しかし、教育者として位置づけられるだけでなく、家庭において神のような絶対者でもある。神が天の「父」と呼ばれること、「父親」が何一つ知らないことのない全知の存在であること、神の摂理を説明する時に「父親」を神になぞらえて説明している（47頁）ことから、神—父親の連関が生じる。家庭内の父権の絶対化は、良妻賢母を理想として女性を家庭に囲い込みながら（『ロビンソン二世』の「母親」が家庭教育の場面では全く出る幕がなく、食事を用意し子供たちを優しく見守る脇役でしかないことを思い出してほしい）家父長制家族形態を揺るぎないものにしていった。カンペが示した新しい家庭像やその使命が市民階級に挙って受け入れられたことは、すでに紹介したように『ロビンソン二世』の出版記録が証明している。「ロビ



ンソン物語」に書き込まれた理想の市民像と共に、その物語の枠構造の中に見られる新しい家族像は市民階級の自己理解を深め、自負心を高めるのに大きな役割を果たしたと言えよう。

カンペの家庭教育は、ここに描かれている「父親」のような教育のできる父たちや「父親」と同等の教育者を家庭教師として雇える財力を前提としている点でも「理想」であった。したがって、劣悪な生活状況にあった下層階級の子供たちは、最初から市民階級の子供たちに対する教育の枠組みに入り切れなかった。カンペは、『いくつかの誤解された、少なくとも利用されていない、産業、住民、公共の福祉促進の手段について』Über einige verkannte, wenigstens ungenutzte Mittel zur Beförderung der Industrie, der Bevölkerung und des öffentlichen Wohlstandes (1786年)において、下層階級の（実際の社会的平等ではないが）解放も教育を身につけることによつてなしうると考えて、これまでの「民衆学校」に代わって「産業学校」で勤勉、注意力、器用さを学ぶことを期待してはいた。しかし、市民階級の子供たちのほとんどが所得を得るための労働から解放されていて、労働の道徳的意味の習得が課題であった一方、産業学校における下層階級の子供たちのための労働教育は、厳しい規律に服させながら単調で時には健康を害するような仕事に慣れさせる内容だった。そして彼らの勤勉さはその当時の経済条件の下で容赦なく搾取されていくことになる。カンペのこの限界も、当時すでに彼が政治的攻撃に晒されていたことを考えれば仕方のないことだろう。カンペやドイツの啓蒙主義者が教育と解放を同等に扱うことの中にこそ、18世紀と19世紀始めのドイツの実情がまさに表現されていたのであるから。

## 註

- (1) イマヌエル・カント（加藤泰史訳）「教育学」、『カント全集』17、岩波書店、2001年、307頁。
- (2) 18世紀における『ロビンソン・クルーソー』の受容については、Brunner, Horst: Kinderbuch und Idylle. Rousseau und die Rezeption des Robinson Crusoe im 18. Jahrhundert. In: *Jahrbuch der Jean-Paul-Gesellschaft*, 2. Jahrgang, München 1967, S.85-117. 特にS.86-91参照。
- (3) Zit. nach Brunner a. a. O., S.87.
- (4) ルソー（今野一雄訳）『エミール』岩波文庫、昭和50年、上、第一編、31頁。
- (5) 同上、上、第三編、325頁。
- (6) 1930年にニューヨークで『ロビンソン・クルーソー』を出版したりミティッド・ブッククラブは、「この版は大人の娯楽のために書かれた文学の古典を子どもから取り戻すためのものである」と強調した。デイヴィット・ブルーエット著（ダニエル・デフォー研究会訳）『ロビンソン・クルーソー』挿絵物語—近代西洋の二

百年(1719-1920)―』関西大学出版部、1998年、176/177頁参照。

- (7) 仏訳、英訳では『新ロビンソン』と訳されている。
- (8) 当時一般的であったように予約申込によって初版2000部が自費出版で刊行された。初版の題名は本文にあるとおり。1780年に2版、1794年に5版、1833年に25版と版を重ね、1789年の第4版以降はカンペのヴォルフエンビュッテル出版社から刊行され、それ以来題名は『ロビンソン二世 子ども向け読本』。あらゆる言語に翻訳され、19世紀にはひろく知れ渡った。ブラウンシュヴァイク教科書書店とこれを継承したヴィーヴェク出版社から刊行された版だけでも、19世紀末までに112版、1923年には122版が出版された。18世紀と19世紀を通じて最も知られた児童書であった。Merkel, Johannes/ Richter, Dieter: Zur Text- und Druckgeschichte und der vorliegenden Ausgabe. In: Campe, J. H.: *Robinson der Jüngere. Ein Lesebuch*. Neu hrsg. v. J.M. und D.R. München 1977, S.465 参照。
- (9) デフォー (平井正穂訳) 『ロビンソン・クルーソー』岩波文庫、2003年、(上)、123頁。
- (10) カンペの経歴については、Merkel, Johannes/ Richter, Dieter: Joachim Heinrich Campe – ein Radikaler im Schuldienst. In: Campe, J. H. (8), S.449-463 参照。
- (11) Vgl. Leschinsky, Achim: Campes *Robinson* als Klassiker der bürgerlich wohltemperierten pädagogischen Reform — ein erziehungswissenschaftlicher Kommentar. In: Vom Wert der Arbeit. Hrsg. von Harro Segeberg. Tübingen 1991, S.80.
- (12) 当時のハンブルクの状況については、Binder, Alwin und Richartz, Heinrich: Nachwort. Joachim Heinrich Campes "Robinson der Jüngere" als literarische Darstellung von Theorie und Praxis des aufstrebenden Bürgertums. In: Campe, Joachim Heinrich: *Robinson der Jüngere, zur angenehmen und nützlichen Unterhaltung für Kinder*. Stuttgart (Reclam 7665) 2000, S.378ff.
- (13) Campe, Joachim Heinrich: *Robinson der Jüngere, zur angenehmen und nützlichen Unterhaltung für Kinder*. Stuttgart (Reclam 7665) 2000, S.19. 以下、テキストからの引用は本文中にページ数のみを記載。
- (14) Siehe Merkel, Johannes/ Richter, Dieter (8), S.438.
- (15) Siehe a. a. O., S.14.
- (16) バゼドーがその主要著書の一つ『教育原理』*Elementarwerk* (1774年)の中で「労働」に付与しているさまざまな価値については、Koller, Hans-Christoph: Erziehung zur Arbeit als Disziplinierung der Phantasie. J. H. Campes *Robinson der Jüngere* im Kontext der philanthropischen Pädagogik. In: Vom Wert der Arbeit. Hrsg. von Harro Segeberg. Tübingen 1991, S42-45参照。
- (17) Campe, J. H.: *Väterlicher Rath für meine Tochter. Ein Gegenstück zum Theophron*. 1830, S.69. 日本語訳はダグマル・グレンツ (中村元保・渡邊洋子共訳) 『少女文学 18世紀の道徳的・教訓的読物から19世紀における「小娘文学」の成立まで』同学社、2004年、79頁借用。
- (18) a. a. O., S.257-284.
- (19) Siehe Binder, A./ Richartz, H. (12), S.402.
- (20) Zit. nach Binder, A./ Richartz, H. (12), S.415f.